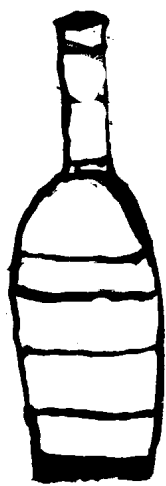


ちも力の
あっちゃん

田辺聖子



あま
カモ力の
あつちやん
ぐ



田辺聖子

田辺聖子（たなべ・せいこ）

1928（昭和3）年3月27日、大阪に生まる。

1947年、樟蔭女子専門学校国文科を卒業。放送作家などを経て、1964年、「感傷旅行」で第50回芥川賞を受賞。著書に、「女の長風呂」「イブのおくれ毛」「文車日記」「甘い関係」「私的生活」「隼別王子の叛乱」「ラーメン煮えたもご存知ない」など多数。

ああカモカのおつちゃん

昭和五十二年二月二十日 第一刷

著者 田辺聖子

発行者 榎原雅春

発行者 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話（〇三）二六五・一二二

印刷 共同印刷

製本所 大口製本

万々落丁乱丁の場合は

お取替致します

ああカモカのおっちゃん／目次

女は太もも	9
ムカシ人間	14
潮吹きマダム	19
一四七センチ	24
差別CM	29
主人	34
女のワガママ	39
男のワガママ	
人生廻り灯籠	44
野暮と粹	49
道鏡	54

ジュッ！

ワイセツとは何ぞ

オトナとは何ぞ

人生の収獲

女と着物

不純のすすめ

女にとって男は必要か？

ショウバイニン

分身(1)

分身(2)

59

64

69

74

79

84

89

94

99

104

分身(3)

ホック

男のウン

女が密室にこもる時

男の放蕩

新鉢

文化芸者

抜けてる男

深よみ

十二月

109

114

119

123

128

133

138

143

148

153

四畳半判決について

手づかみ

お茶とお酒

セリ売り

二十一世紀ごっこ

おっちゃんの古代文明論

ぼてれんの秘密

会長ごっこ

和合

クセのもの

203

198

193

188

183

178

173

168

163

158

恋愛病患者

208

ハヤリスタリ

213

あなたも夫を愛せます

218

五段返し

223

給食

228

デキの悪い息子

233

おばはん

238

男はロマンチック

243

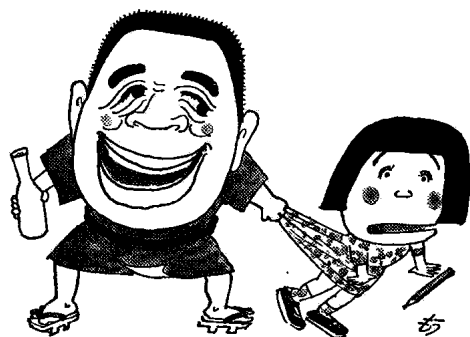
通訳殺し

248

一次会・二次会

253

ああカモカのおっちゃん



装帧
カッ ト 高橋 孟
高橋 孟

女は太もも

今夜は珍しいお客サンがきた。私の小学校時代の友人である。

この人、機械関係のエンジニアで堅物サンであるが、酒を愛し漫才を好む人。角塚一本提げて、ニコニコして、

「こんばんは」

とやってくる。男あり、酒を携えてきたる、また楽しからずや。私は大よろこびして、

「ちようどよかった、もうひとり、いつも『あーそびーましよ』とくるのがいるんだ、アイツを待って飲もうね」

「知ってます、カモカのおっちゃんでしょう？」

と、機械屋の、キタノサンはいう。

「僕いつも、おっちゃんの話は読ませて頂いておりますから」

キタノサンは、昔ニンゲンであるから礼儀正しいのである。ちゃんと敬語も知っている。

そうして彼の名刺の肩書には、「盲腸」とドッコイドッコイであるが、泣き泣きでも「長」とついていようというポジション。

同級生だから年はおなじで、

「サイタサイタ

サクラガサイタ」

という読本を、声張りあげて共に読んだ戦友である。

あんまりカモカのおっちゃんが来ないので、家へ電話してみたら、おっちゃんは家にいた。

「肝臓をいためましてな、これから入院するところです」

「ナヌ？ 肝臓をい、わした？ ドジ。スカタン。ぬけさく。健康も才能のうちなるぞ」

「いや、そういわれるとまことに尤ももつとであります、まあゆっくり休養できてこれも、芸のうち。

——さらには病院というからには看護婦サンもおりましたしやろうな」

「そりやア、いるでしょ」

「しめた、ヌハハ……。ぼちゃぼちゃ、むっちり、ふっくら、すべての看護婦サンにやさしくいたわれ、触っていただくのしみもあり。やあ、人生いたるところ、スカートありますな。

ちよいちよい、お電話下さい、今週の病状と共に、今週の成果も報告します」

「そういう人には、鬼をもひしく、いかつい婦長サンなどがつくのです」

「それはそれでまた格別の風情あり」

「お酒を飲めないのは辛いやろ」

「いやいや。飲めんから、いうて悲しむのは大人物ではありませんぞ。大人物は三度のメシでも、酔うことができるのです。いやア、入院生活が嬉しゅうて嬉しゅうて。何しろ、目先の変ったこと、というのは大好きですからな」

口のへらぬ男であるのだ。

仕方ないから、私は、キタノサンとさしつさされつ、飲む。

こっちは、カモカのおっちゃんとかがつて四角四面だが、しかし、同世代の幼馴染み、青いレモンの氣やすさで、氣心が知れていい。

「人生いたるところスカートあり、なあんで、ほんとに中年男つて図々しいね」

と私がいうと、キタノサンは首かしげ、まじめに考えこむ。

「そうかなあ、僕なんか、リチギ、マジメ、小心ですから、図々しいとは、思われへん。よう世間では、いやらしい四十男とか、中年男の脂切った欲望なんて、ポルノ映画の看板みたいなこと、いいますが、そうかいなあ。図々しい中年男なんて、どこの世界のひとかと思えますよ」

「図々しい中年男自身も、そういつてるでしょうね」

「ハッハハハ」

キタノサンの笑い方は、正眼にかまえた型でハッハハハというのがクセ。素直なのだ。ヌハハ

ハ……とか、いひいひ、わひわひ、などと笑わない。

素直な御仁だから、何でも素直にこたえる。

「ねえ、キタノサン」

「何ですか」

「男の人って、ほんまに入院しても看護婦サンのことばかり、意識してるんですか」

「さあ。僕は幸か不幸か、とびきり健康で、入院の経験はおまへんが、しかし男としては、たえず女のことは、意識のスミにひっかかっているでしようなあ。看護婦さんだけや無うて」

「全然考えてないときもあるでしょ、たとえば、仕事のミスで上司に叱られるとき、とかさ」
「小学生のとき、女の子の居てる前で先生に叱られるのは切なかったですな。男なんて、四十になっても、小学生みたいな気分がどこかにありまして、同じですよ」

「同じでないとこって、どこかなあ」

「まあ、それは、女を知ると知らぬとではえらい、ちがう」

「キタノサンは、おくさんがはじめてですか？」

「いや、ちがいます。その前に知ってました」

こういう所、キタノサンが機械屋だから正確なのではなく、男だから正確なのである。

女は、こういうとき、きまって、ゴマカしたり、ウソついたり、話をおぼめかしたり、わからぬ風をする。男は正直でいい。

「はじめて女の人を知って、何にいちばんビックリしたの？ 教えて教えて」

と私はせがむ。

「さよう」

キタノサンは正確を期すべく、再びマジメに考えこみ、

「ふともも、でした」

「太腿」

「はあ、女のおとももって、こない太いのんか、とビックリしました。太うて白かった」

「それは何ですか、年増で肥満した女性？」

「いや、すんなりした娘でしたが、外から、あるいは横から見とっても分りませんでした。それが、脚あげたん正面からみたら、ほんとに太うて白うて——」

私、一生けんめい考えたが、どうもよくその状況がハッキリしません。私の方は、というと、男性の軀をはじめてみて一番ビックリしたのは、

「あのお、揺れてることでした。だって女の体で、揺れてるトコなんてないんですもの」

「バカ、あほ。淑女がいうことちゃう」

昔ニンゲンのキタノサンに叱られた。

ムカシ人間

わが幼馴染みの友、キタノサンはまたきた。

ニコニコして、やってくる。

「こんばんは。カモカのおっちゃんのお見舞いにいきませんか」

「いってもよろしいんですが、べつにせいていく所ではなし、まあ一杯飲んで、ほろ酔いになつてから出かけましょう。病院なんて喜んでいくとこ、ちゃう」

「ここで飲んでると沈没しそう」

といいつつも、キタノサンは、よっこらしよ、とうれしそうに坐る。

「気取らぬ酒が飲めるといふのは最高でございます」

「おうちでめし上るのは、気取る酒ですか」

「家では晩酌やりまへん。女房は、酒のサカナつくるのが大ごとや、いうて支度してくれません。